

自由図書の部 次点

山岸はるかさん 理工学部物質生命理工学科3年

『シンギュラリティ・ビジネス～AI時代に勝ち残る企業と人の条件～』

齋藤和紀著/幻冬舎

「あなたはこれから生き抜けるのか」

自分が就職活動をするにあたり、みなさんは何を重要視するだろうか。福利厚生、会社の雰囲気、業種内容が自分に合っているか等、様々な意見があると思う。もちろんそのどれもが大切なことだが、実はそれよりもっと重要なことがある。私が思うに、それは「その会社がこれからも存在し得るかどうか」という事だ。

この書の著者・齋藤氏は、未来を変えるテクノロジーとして、今注目されているものにAIを挙げている。AIが人間を超越するのではないかと心配され始めたのと同時に、マスメディアでは「シンギュラリティ」という言葉が注目されたと言う。「シンギュラリティ」とは技術的特異点、つまり技術が進歩する速度が無限大になる点を表している。今となっては避けられなくなったシンギュラリティに、我々がどのように対応していくのが大切だと警鐘を鳴らす。

具体的にはまず、「革命」がすでに始まっているということ認識する事が大事と強調する。今AIやナノテクノロジーなどを中心に起きている変化は、新しい動きである。そしてこの動きはどんどん早くなっている。この中で生き残ることが出来るのは、世界規模のマーケットを意識している企業であり、日本の場合、国内のマーケットを見ている企業が多く、そこに将来性はないと断言する。「業界の垣根」を越え境界線を無くし、多様なサービスを提供する事でいわゆるプラットフォーム企業になれる。数十億人のマーケットを取りに行くことが、その企業の持続性へと繋がるのだ。

また、境界線がなくなるのは会社や業界の「外側」だけではない。会社の「内側」にある境界線もなくなっていく。特に、経理部や人事部などのバックオフィス機能の境界線は無くなり、それらの業務はデジタル化されてAIが担うようになる。そのため、それぞれの領域で専門家としてキャリアを重ねるのは難しい。また、これは会社のバックオフィスで働く人に限ったことではない。弁護士、税理士といった知的労働は人間にとっては全く業種が異なるものであったが、AIにとっては単なるデジタルデータの処理となる。そのため、「資格」という境界線で区分された仕事の将来はあまり明るくない、と指摘する。

それではこれから生き残るのはどのような会社なのか。シンギュラリティ大学の創業ディレクターであるサリム・イスマイルは新しい時代に求められる組織を「エクスポネンシャル・オーガナイゼーション」と名付けている。イスマイルが組織に必要なと考えた特徴は、①オンデマンド型の人材調達、②コミュニティとクラウド、③アルゴリズム、④外

部資産活用、⑤エンゲージメント、⑥インターフェース、⑦ダッシュボード、⑧実験、⑨自律型組織、⑩ソーシャル技術の10項目だ。この10項目を備え、常に変化を許容出来る組織(=会社)こそが今後、求められる会社であり、生き残れる会社なのだ。

以上のようなこの書の視点は、冒頭で私が重要視した「その会社がこれからも存在し得るかどうか」という点に関して非常に示唆的であった。2017年に倒産した会社の平均寿命が23.5年という事を考えると、会社の寿命というのは就職活動を進める上でとても重要なポイントになる。会社の雰囲気や経営理念が気に入りに、就職したところで倒産してしまつては元も子もない。

今まで会社の将来性というのはどのように判断したら良いのか、明確な判断基準を持っていなかった。しかし、この書を読んだことでしっかりとした判断基準を得られつつある。私自身も避けられないシンギュラリティに対して適応出来る人間でありたいし、「エクスポネンシャル・オーガナイゼーション」のような会社で自分の力を最大限発揮できる人でありたい。